

平成 22 年 5 月 24 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520721
 研究課題名（和文） 中越地震後の山古志への「帰村」に関する民俗学的研究
 研究課題名（英文） Folkloric researches on 'Return to Yamakoshi'
 after the Niigata Chuetsu earthquake

研究代表者
 陳 玲（CHEN LING）
 新潟県立歴史博物館・学芸課・研究員
 研究者番号：10373474

研究成果の概要（和文）：

山古志地区は、2004年10月23日に突然襲ってきた新潟県中越地震で、一瞬のうちに、一部を除き、住宅の全壊、道路と田畑、山の崩壊など、これまで築かれてきた生活環境が完全に破壊された。地震後、行政措置として「全村避難」が決断された。避難所に引き続き、仮設住宅は、それまで維持してきたコミュニティを考慮した配置構成がなされ、それを暮らしの場とした被災生活が3年間続いていた。その間、「皆で山古志へ帰ろう」というキャッチフレーズ、いわゆる「帰村」をめぐる、集落移転、宅地と墓地の再編、住宅と墓の再建、水利と棚田の復旧活動などが展開されてきた。

本研究では、人びとの暮らしや生きる知恵などを研究対象としてきた民俗学のこれまでの視点や方法を用いながら、現代社会という時間軸において、山古志地区の住民が災害に対して、いかに適応し対応し、そして、さまざまな葛藤する問題の中でいかに生活の再建に向かって取り組んできたのか、その実態の把握、記録、考察を行なった。「帰村」をめぐる復旧、復興活動を、いずれも生活再建、社会組織の再編過程そのものとして捉えた。

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 19 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
平成 20 年度	900,000	270,000	1,170,000
平成 21 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総 計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：「帰村」 民俗文化 アイデンティティ 民俗再生 災害民俗

1. 研究開始当初の背景

2005年10月23日に起きた新潟中越地震では、新潟県中越を中心とした地域が大きな

被害を覆われた。中越地域の中山間部に位置する長岡市旧山古志村14集落は、一部を除き、これまで築かれてきた生活環境が完全に

破壊された。

国と県と長岡市の支援により、ライフラインは復旧の途上にあるなかで、地震後当初、村は「皆で山古志へ帰ろう」を目指した村の復興プランの村落理念を掲げたが、一方、個々のムラ人は、震災を契機に過疎化が深刻な山古志へ「帰村」か「村外移転」かという自己意識による選択の現実に直面していた。

「帰村」の一連事業、すなわち集落移転、宅地と墓地の再編、住宅と墓の再建、水利と棚田の復旧は、どれも生活再建、社会組織の再編の実態そのものであると認識した。その一方、地域コミュニティを継承した仮設住宅の配分、震災支援活動を続けるボランティアセンターをはじめとする支援団体、マスメディアとの関わりのなかで、仮設住宅の生活形成がされるにつれ、新たなコミュニティも発生していた。これらの現実の社会過程において、平常時に見られない村落社会、家・家族と個人の相互作用する実態が浮き彫りになっていったという現実が本研究の背景にあるものである。

2. 研究の目的

全体的に中越地震という突発的で非常に大きな破壊力を持つ出来事による生活環境の完全破壊と、その後の生活再建、村落社会の再編を、生きる民俗全体の中で捉えることをめざすと同時に、従来の日本民俗学が主に対象としてきた日本の村落社会に見られる持続静態的な側面に対して、このような大型地震による災害避難、仮設、復興という実態を、「皆で山古志へ帰ろう」という村落社会の再編成における現実の社会過程とし、日本の村落社会の民俗を理論的に再検討し、その特質を明らかにすること目的とした。

具体的に、一つは村落社会の共同性の問題、すなわち家を媒介しない個人、あるいは村外に展開する不定型の関係性、第三の共同性のあり方について、地震後の山古志への「帰村」という実態から実証すること。もう一つは家・親族・家族のネットワークを動的に捉えようとするものである。

3. 研究の方法

本研究では、人びとの暮らしや生きる知恵などを研究対象としてきた民俗学のこれまでの視点や方法を用いながら、現代社会という時間軸において、山古志地域の住民が災害に対して、いかに適応し対応し、そして、様々な葛藤する問題の中で生活の再建に向かって取り組んできたのか、その実態の把握と考察することを目的とした。言い換えれば、「帰村」をめぐる復旧、復興活動を、いずれも生活再建、社会組織の再編過程そのものとして捉えた。

本研究は、研究代表者が被災者の支援という形のなかで、地元の人びとの信頼を得、住民との関わりをもつようになったところから始まったものである。そのなかで、震災という非常時に置かれながら、人びとの取り組んできた日常的な実践と接するなかで、一方的な被災者意識を喚起したマスコミ報道などに大きな疑問を感じたのである。災害という現実に向かって、人びとがこれまでの暮らしのなかで蓄積してきた生きる知恵や方法などを活かし、様々な問題に立ち向かって、実践していく姿が見られたのである。被災地では、地域の現実的な理解に目を向けながら、柔軟に対応していく姿勢が求められてきた。現場において参与観察だけでなく、体験者として人びとと交わりを持ちながら研究を進めることが、民俗学における応用的な実践と認識した。

本研究期間では、おもに二つのことに絞って実態を明らかにした。一つは、山古志地域のこれまでの民俗生活文化の特色を明らかにすること。もう一つは、「全村避難」した後、3年間にわたる仮設住宅での生活実態を究明することである。これらは、本「帰村」研究に関する二つの大きな枠組みとして考えた。なお、後者の場合は、特に、山古志応急仮設住宅の各種事業に密接に関わりを持った山古志ボランティアセンターの日常の活動を追いながら、仮設住宅を場とした3年間にわたって地域の住民の日常的な活動や生活の再生の営みの実態に関する聞き取り

調査を実施した。

4. 研究成果

新潟県中越地震後、全村避難した山古志地域を中心に、これまで主に住宅の全壊、道路の崩壊など被害の甚大な6集落(19年4月1日まで避難指示がされていた油夫、梶金、木籠、大久保、池谷、檜木)の3年間にわたる仮設住宅での生活実態を対象に、行政などの対応にも注目しながら、仮設住民の日ごろの震災復旧、復興活動に直接にかかわりを持ちつつフィールドワークを実施しつづけてきた。仮設住宅での生活を送る山古志地域の人々は、「皆で山古志へ帰ろう」という震災直後の旧山古志村長による呼びかけのもとで、完全破壊された山古志という体験と記憶を呼び戻しながら、震災という非常な生活状況から日常の生活再建を行ってきた。本研究では、その過程を、民俗学の方法を用いて、詳細な記録を行うことによって以下のことを明らかにすることができた。

一つは、それまで蓄積されてきた地域の間人関係を生かした仮設住宅の配置への行政側の対応のもとで、それまで維持されてきたコミュニティが大きな役割を果たしたことである。山村の民俗文化の力により、震災による不安から癒しを得、非常時という状況から徐々に日常の生活リズムを取り戻していくことを明らかにした。具体的にいえば、山の暮らしで蓄積されてきた生活技術と知恵、人々の生きる営みが震災後立ち上がるための原動力となっていることが分かった。

二つ目は、3年間にわたる仮設住宅の生活において、人々は破壊された「山古志」という体験と記憶を取り戻し、生業や人間関係も含めてその生活全体を回復するなかで、仮設住宅を場として「山古志村」という想像された生活の時空間を創出したことである。この仮設住宅においての「山古志村」という生活時空間の創出は、非常状況から日常生活を取り戻す過程であると位置づけられると同時に、ボランティアをはじめとする個人や団体、震災応援活動が契機となる外部とのつなが

りや結びつきを築き、新たなコミュニティを創出してきた過程でもあり、自己のアイデンティティの再構築の過程でもあったことを明らかにした。

一方、この仮設住宅での3年間は、個々の人々にとっては、個人の意思による「帰村」するか、「離村」するかの選択を決断する葛藤の日々でもあった。本研究でおもに対象とする6集落に限って言えば、その帰村意向は、震災時の93%、平成17年10月の71%、震災から1年4か月後の平成18年2月の65%、そして、2年4か月後の調査では82世帯52%になっており減少傾向にあった。3年が経過し仮設住宅を全員が退去した平成20年1月時点では、帰村したのは80世帯51%に過ぎなかったのである。このように個人の帰村意思が固められる中、個々の集落再建と再生が仮設住宅入居すぐの最優先課題として取り組まれてきた。合併後長岡市の復興計画で特定地区と位置付けられたこの6集落の再生については、各集落の意思を尊重しながら、平成17年9月に、6集落のうち4集落は現在地での再建を目指し、土砂崩れダムによって水没した木籠・檜木の2集落については、近隣に移転して新しい集落を作るという基本方針が定められた。

三つ目としては、こうした民俗社会における「個人」の役割について注目し、災害発生後の集落再生、コミュニティの創出という現実の中で考察した結果、震災後再び中山間地の山古志へ帰る、すなわち「帰村」という過程のなかで、集落の中心的人物(震災後連続して任期をもつ区長)が大きな役割を果たし、この時期における区長の意志がその後の集落再生に大きく反映していることを明らかにした。

さらに、本研究において、山古志災害ボランティアセンターの活動軌跡を追い、それを中越地震後、避難、仮設住宅、そして復旧、復興をめぐる地域における人びとの諸活動の実態の一側面として把握し、震災後の活動日誌を資料化させた。また、震災後の生活再生はそれまでのコミュニティを継承した仮

設住宅での生活形成から始まったこととその意義について検討した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計5件)

陳玲「震災と民俗資料」第二回「山古志の歴史を語る会」山古志会館平成20年6月28日

田邊幹「復興と文化遺産」第二回「山古志の歴史を語る会」山古志会館平成20年6月28日

陳玲「農から始まる日常づくり - 仮設住宅での3年間の生活を追って -」シンポジウム 復興への原動力「民俗文化財」新潟県立歴史博物館講堂平成20年7月21日

谷口 陽子「山古志にある二つの復興「生活」の復興から「文化」の復興へ」シンポジウム 復興への原動力「民俗文化財」新潟県立歴史博物館講堂平成20年7月21日

池田 哲夫「避難民具の整理から」シンポジウム 復興への原動力「民俗文化財」新潟県立歴史博物館講堂平成20年7月21日

[図書](計11件)

陳 玲「ヤマをさわぐー生ー山の植物採集を中心にー」『牛の角突き 街道をゆく 小千谷東山・山古志・蓬平温泉の素顔を探るガイドブック』新潟県長岡地域振興局20年1月25日 45-47

田邊幹「宮本常一の山古志むらおこし」『牛の角突き 街道をゆく 小千谷東山・山古志・蓬平温泉の素顔を探るガイドブック』新潟県長岡地域振興局20年1月25日 36-37

陳玲「山古志の暮らし」『山古志ふたたび』新潟大学人文学部地域文化連携センター、新潟大学災害復興科学センターアーカイブス分野20年3月25日 2-9

田邊幹「棚田と山古志の農業」『山古志ふたたび』新潟大学人文学部地域文化連携センター、新潟大学災害復興科学センターアーカイブス分野20年3月25日 10-11

森 行人「生活の中の牛」『山古志ふたたび』

『山古志ふたたび』新潟大学人文学部地域文化連携センター、新潟大学災害復興科学センターアーカイブス分野20年3月25日 12-13

岩野 邦康「隋道を掘る」『山古志ふたたび』新潟大学人文学部地域文化連携センター、新潟大学災害復興科学センターアーカイブス分野20年3月25日 16-17

田邊幹「新潟県立歴史博物館の取り組み「山古志ふたたび」展」『災害と資料』第3号 新潟大学災害復興科学センターアーカイブス分野 43-52

池田哲夫・飯島康夫「旧山古志村所蔵民俗資料の整理状況について」『災害と資料』第3号 新潟大学災害復興科学センターアーカイブス分野 43-52

池田哲夫「民俗資料点描」『災害と資料』第3号 新潟大学災害復興科学センターアーカイブス分野 56-58

飯島康夫「旧山古志村民俗資料館所蔵の養蚕具」『災害と資料』第3号 新潟大学災害復興科学センターアーカイブス分野 59-67

陳 玲ほか、陳 玲『中越地震後の山古志への「帰村」に関する民俗学的研究 平成19年度～平成21年度科学研究費補助金基盤研究(C) 課題番号19520721 研究成果報告書) 2010、149

[その他]

成果還元情報

新潟県立歴史博物館20年6月21日～8月3日 「山古志 ふたたび」展

新潟県立歴史博物館講堂20年7月21日シンポジウム「民俗文化財 復興の原動力！」

新潟県立歴史博物館講堂20年7月21日菅豊 講演会「越後の錦鯉と角突き文化」

新潟県立歴史博物館22年3月7日安室知 講演会「棚田の可能性 その未来像 民俗学からの提言」

6. 研究組織

(1)研究代表者

陳 玲(CHEN LING)
新潟県立歴史博物館・学芸課・研究員
研究者番号:10373474

(2)研究分担者

飯島 康夫 (IIJIMA YASUO)
新潟大学・人文社会教育科学系・准教授
研究者番号：20313489

池田 哲夫 (IKEDA TETUO)
新潟大学・人文社会教育科学系・教授
研究者番号：50313490

中野 泰 (NAKANO YASUSHI)
筑波大学・人文社会科学研究科・講師
研究者番号：20323222

田邊 幹 (TANABE MOTOKI)
新潟県立歴史博物館・学芸課・研究員
研究者番号：50373478

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者

岩野 邦康 (IWANO KUNIYASU)
新潟市歴史博物館 学芸員

森 行人 (MORI YUKIHITO)
新潟市歴史博物館 学芸員

谷口 陽子 (TANIGUTI YOUKO)
専修大学 非常勤講師